

特集・先進的な障害学生支援の取組～障害学生支援ネットワークより～

二 第二回筑波大学障害学生支援研究会の概要

本学で特質的に取り組んでいる研究として、以下の四つの発表がなされました。

(1) 視覚障害学生支援者養成プログラムの開発

(青柳まゆみ「OSD専門委員」、視覚障害学生支援チーム学生)

視覚障害学生支援の中枢をなす印刷物のテキストデータ化や、その他の応用的な支援技術の講習について、五年間の実践を通して開発したプログラムの具体的な内容が紹介されました。

障害学生の支援者養成は全国的な重要な課題の一つとされているため、本プログラムを他大学でも実践可能な汎用性のある内容に変更し、提案して行くことを目指しています。

(2) 聴覚障害学生支援の現状とコーディネートシステム(CAS)の開発

(原島恒夫「OSD専門委員」、聴覚障害学生支援チーム学生)

複数の聴覚障害学生に対する通訳を円滑に行うために

は、支援者のコーディネート作業が必須です。従来より手作業で行われてきたこの作業を一部自動化するために開発されたシステムの概要が紹介され、本システム導入によるコーディネート作業の負担軽減の可能性が示唆されました。現状では筑波大学での試験的運用ですが、将来的には他大学での利用の可能性についても検討することを目指しています。

(3) 運動障害学生支援のためのアセスメントプロセス

(山中克夫「OSD専門委員」、運動障害学生支援チーム学生)

これまでの支援実績を基に、系統的支援を行うための初期アセスメントの項目作成とプロセス構築に関する予備的研究の成果が報告されました。

アセスメントの項目としては、①改修・配置変更のニーズ、②機器購入・設置のニーズ、③履修・授業における支援のニーズ、④移動支援のニーズが挙げられました。またアセスメントのプロセスとしては、専門教員が入学決定後の早い段階で行う一次アセスメントと、支援チームの学生スタッフが中心となって行う実際の学生生活場面に照らした二次アセスメントの二段階が提案されました。

特集・先進的な障害学生支援の取組～障害学生支援ネットワークより～

(4) 障害科学類障害者特別選抜の現状と課題

(前川久男「人間学群障害科学類長」)

筑波大学人間学群障害科学類が平成一九年度入試より導入している障害者特別選抜について、実施の経緯と選抜基準の概要、本取り組みの意義等が紹介されました。

障害者特別選抜は、一般学生が障害学生とともに学ぶことによる教育的効果と、障害学生が自立した障害者のリーダーとして育つことの双方を期待した取り組みであることが説明されました。

第二回目となる今回は、障害学生支援の一層の充実を目指し、学外からも講師をお招きして先駆的な取り組みに関する情報の共有を図りました。

慶應義塾大学の中野泰志氏には、在学中に視力低下が見られた学生の支援事例を、筑波技術大学の三好茂樹氏には、音声認識技術や通信技術を駆使した聴覚障害者への情報保障に関する最新の研究動向を、それぞれご紹介いただきました。

また、日本学生支援機構の小越真一朗氏には、障害学生修学支援ネットワーク事業の取り組みと、全国の障害学生支援の現状についてご報告いただきました。

さらに、教育講演「高等教育機関における発達障害学生の理解と支援」(野呂文行「筑波大学人間総合科学研究科・OSD専門委員」)においては、発達障害学生が困難さを抱える具体的な場面が紹介され、その困難を補うための様々な支援方法と課題が提案されました。

三 おわりに

筑波大学のFD研修にも位置づけられた今回の研究会には、学内外から約一〇〇名の方々に参加いただき、障害学生支援に対する理解を深める貴重な場となりました。今後、障害学生支援の一層の充実を目指した研究的取り組みを継続し、情報の発信に努めていく予定です。

また、医学や体育を含む様々な学類と研究科に障害学生が在籍していること、障害科学のみならず多領域の研究スタッフが集まっていることなど、総合大学としての本学の特徴を生かして、より充実した新しい研究にも取り組んで行きたいと考えています。



パソコン通訳の様子